全博協研究紀要　第25号
2023年３月31日
全国大学博物館学講座協議会

日本博物館史研究の分析

川 﨑　真 緒

日本博物館史研究の分析

川﨑　真緒*

はじめに：

本稿は日本国内で行われている博物館に関する研究のうち、博物館概念を規定する過程として博物館史を位置付け、その記述方法の分析を行うことで、日本博物館学における博物館概念の理解について考察を試みるものである。

この博物館史の分析について、まず別稿において、研究背景として博物館法改正、ポストコロナの情勢に言及し、現代日本において博物館の存在意義、つまり「博物館とは何か」を問う「博物館学」の必要性を確認した上で、その「博物館学」内において博物館を特定の社会の中に位置付けていくものとして「博物館史」を定義づけ、西洋の博物館を「ミュージアム」、日本の博物館を「博物館」と名づけ直しながら、まず日本「博物館」のオリジンとされている「ミュージアム」史の国内における記述について分析を加えた。

分析方法としては、「博物館学」「博物館概論」等の概説書内での記述、「博物館（ミュージアム）史」のみを扱った著作での記述、そして「ミュージアム」を思想的に扱った著作内での記述の三つにテキストを分類し、その着目点や記述方法の違いを「ミュージアム」概念の理解の程度の表れとして捉えた。

本稿は上記の「ミュージアム」史に連なるものとして描かれる日本「博物館」史に関する分析である。分析の手順[1]は、「博物館学」「博物館概論」のテキスト、「博物館史」のみを扱ったテキスト、「博物館史」に対し思想的分析を加えたテキストを使用し、それぞれの記述の差に着目することで導かれる「博物館」史研究の課題点について言及し、これら「ミュージアム」史・「博物館」史の国内における記述の祖型として棚橋源太郎の博物館史研究を取り上げた。そして最後に、西洋「ミュージアム」史と日本「博物館」史の相違点から、今後の展望を示した。

なお、特定の社会にあるものとして「ミュージアム」「博物館」を描く上では、先にも書いたようにこの二つを別物として扱う必要が出てくる。そこで本稿では、西洋の博物館を「ミュージアム」、日本の博物館を「（日本）博物館」と書き分ける。博物館にまつわる研究に関しても同様に、西洋「ミュージアム」に関する研究を「ミュゼオロジー」、日本における博物館研究を「博物館学」[2]とする。

ただし、引用・参考にする文献に関しては、該当する箇所の表記に従う場合もある。

＊明治大学大学院文学研究科臨床人間学専修　博士前期課程

日本博物館史の分析：

ここでは、別稿（川﨑　2023）にて分析した西洋「ミュージアム」史同様、「博物館学」および「博物館概論」のテキスト、専門研究、思想的分析の順にその記述方法を捉えていきたい。

（1）博物館学における博物館史

まず日本の博物館史について、「博物館学」「博物館概論」のテキストを参考に明治前期までの大まかな流れや記述を見ていく。

ここで明治前期までとしたのは、明治後期からの帝国主義の盛り上がり、二度の大戦、そして現代という流れを思想的に全て網羅できた例は少ないというコンテンツ的な問題と、またそれを概観するには論文一本どころか著作何作かが必要になるという物理的な問題が背景にある。また、ここでは直接触れないが、著者の関心の一つに博物館における前近代・近代の思想的連続性の有無というものがあるためというのも一つの大きな理由である。

では早速、共通的に辿られる出来事を整理してみよう。

日本の「博物館」的施設として最初に紹介されることが多いのは「正倉院」である。矢島國雄（1997）はこれを、一般に公開されることがない「保存」の典型であると述べている。先のミュージアム史の描き方からみても、この両者は「公開性」や「公共性」にミュージアムの軸を置いているため、このような評価になっているのだろう。また、『博物学Ⅰ』の著作内での矢島の記述に関しては、近世（江戸）以降から日本博物館史をはじめており、これもまたミュージアム史の時の表現に重なるものである[3]。

吉田憲司は矢島（1997）と同じく正倉院から説明を始めるが、「収集」「保存」を博物館・美術館の根幹と捉え、その萌芽として正倉院を持ち出すというところが異なる。

この正倉院を筆頭に、寺社仏閣におけるコレクション形成が指摘され、ここに中世ヨーロッパとの重なりを見出すものもある[4]。その次によく登場するのが武家による茶の湯の文化の形成と、それに伴う茶道具のコレクションである。これは「収集・保存」方法の確立としてだけではなく、「鑑賞する」こと、つまり自分で見たり、人に見せたりする文化の確立として取り上げられる。

この人に見せるという行為としては、寺社仏閣も「開帳」を行なっており、こと近世においては大きな流行として確立されていくようになる。矢島（1997）の記述によれば、教化手段であったものが、江戸期には収益事業として行われていくようになるという。これは、日本の展示の歴史が経済活動とともにあったということの重大な示唆である。また、吉田は、この「出開帳」と類するものとして「見世物」を挙げている。珍獣や奇人、つくりものなどが娯楽として展示され、人々の好奇心を集めたというところは、現代の大きな博物館におけるブロックバスター展を思わせる。

ただ、矢島（1997）・吉田両者ともに、日本の博物館前史に対し、ただ人々が収集・保存されたものを見る、という要素だけでなく、学問とのつながりがあったことも示唆している。それが、本草学の主宰した「物産会」「薬品会」である。吉田によれば、これは幕府や諸藩における国産品開発の流れの中にあるものであるという。それはつまり、本草学や物産会が、見世物や縁日といった直接的な娯楽・消費活動ではないにせよ、経済活動を支える学問であったということである。

また、この本草学の文脈について、矢島（2012）は、やがて流れくる西洋科学の受け入れを準備したものであると指摘する。これはミュージアムという空間（ハコ）の輸入に止まらない、思想的枠組みの受け入れについて言及するものであると言える。矢島によれば、本草学（物産学）は明治期に入り博物学と理化学に整理され、異質であるはずの西洋科学というパラダイムを受け入れる土壌を築いたという。これについて矢島（2012）は、以下のような言葉を添えている。

> 知的な世界理解が、創造主である神の御技とぶつかるという緊張関係のなかで発展した西欧の科学と、単一かつ明確な体系性をもたず、多くのものが相互に軋轢をもたずに併存しえた文化のちがいといえばそれまでであろうが、かえってそれによってパラダイムの全体を受け入れなければ変われないといった状況を生まずに、選択的に多くの制度や文物を移入できたという見方も多くの識者が指摘していることである。（矢島、2012、p63）

ここで示唆されていることはつまり、博物館という概念の受け入れは、何らかのパラダイムシフトを伴うものではなく、既存の枠組みの一つとある種「同一視」され、座を与えられたに過ぎないということである。その受け入れの「器」とされたものが「物産会（物産学）」であり、やがてその物理的な箱として生まれたのが「博物館」なのである。ちなみに、「物産会」をあくまでも前史とするのは、恒常的な展示ではないというのが矢島（2012）の解釈である。

では、この恒常的な「箱」のアイデアはどこからやってくるのか。

ここで登場するのが幕末期の遣欧遣米使節団である。そして、その中でも特に注目されるのが福沢諭吉の欧米見聞録『西洋事情』である。ここでは、ヨーロッパ・アメリカの「博物館」と「博覧会」が一つの独立した項目として紹介されている。ちなみに、多くの著作が福沢を取り上げるのは、「博物館」という言葉を創り出した点ではなく、その様子や実際を広く世に知らしめ、「博物館」という言葉を「museum」の訳語として定着させたからである[5]と考えられる。

そしてやがて実際に明治初期の博覧会や博物館政策を行なっていくのは、福沢と同じようにヨーロッパを見聞した田中芳男、町田久成、佐野常民の三者である。田中は幕府の、町田は薩摩藩の、佐野は佐賀藩の後見を受けてパリの万国博覧会（1867年）に派遣され、それをもとに明治新政府に出仕、博覧会・博物館政策を進めていく。江戸時代には洋学の拠点であった蕃書調所が明治政府において「大学南校」として引き継がれ、その中に殖産興業の推進部局の一つとして「物産局」が作られる。ここが中心となって博覧会が企画され、1871年、九段下の招魂社にて「大学南校物産会」が開催される。矢島によれば、これはその名前の通り江戸時代の「物産会」を脱したものでなかった上、恒常的な博物館にはつながらなかった。

同年、大学が廃止された代わりに文部省が設置され、物産局はその中の博物局として再スタートを切ることになる。この博物局が1872年、湯島聖堂の大成殿で「文部省博物館」の名で博覧会を開き、閉会後も展示を公開した。これが「日本博物館」の始まりであり、同時に現在の東京国立博物館の始まりとされている。

この日本最初の「博物館」について矢島（2012）は以下のような分析を加えている。

> 「大学南校物産会」「文部省博物館」がともに江戸時代の物産会の域を出なかったとの評価

はそのとおりであろう。…その展観の状況は、江戸期に通有の見世物とほとんど択ぶところはない。…明治初期にわが国の博物館創設に中心的な役割を果たした前述の三人は、田中は本草学者で、町田は古文化財の目利き、佐野は殖産興業の尖兵と、それぞれの志向性や資質にちがいがあったが、これに蜷川式胤や九鬼隆一が加わって博物館づくりが進められていた状態では、江戸期の物産会を大きく抜け出ることはむずかしかっただろう。（矢島、2012、p64）

ここで興味深いのは、日本の博物館として定義されているものが名目上は「博物館」であっても、実情は限りなく物産会に近しい博覧会であったということである。博覧会と博物館の距離の近さ、また器としての物産会というところは、先に矢島（2012）が指摘したように、博物館政策が何らかのパラダイムの変化も伴わなかったことの証左であると言えよう。

この点については、後ほど「日本博物館史への思想的アプローチ」でも見てゆくが、結局明治初期の博物館政策では、その成立のスピードからしても西洋ミュージアム概念そのものの輸入は叶わなかったように見える。しかし、この不完全さこそが日本の「博物館」を「博物館」たらしめていくのである。

形の上だけとはいえひとまず「博物館」を成立せしめた明治政新府が次に取り組んだのは、オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ一世の治世二十五周年を祝するウィーン万国博覧会への参加であった。この準備のため、政府は太政官正院に博覧会事務局を創設、総裁に大隈重信、副総裁に佐野、御用掛に町田・田中を置き、事実上文部省博物局を吸収する形となった。これに伴い、文部省博物局・博物館・書籍館（現国立国会図書館）・小石川薬園（現東京大学付属小石川植物園）は併合されるが、この統合が火種となってやがて日本の博物館は二つの文脈に分かれていくこととなる。

ひとまずウィーン博覧会への参加にあたっては、博覧会事務局は顧問ゴッドフリード・ワグネル（Gottfuried Wagner）の指導を受け、鎌倉の大仏の張り子をはじめ、漆器、織物、陶磁器など日本の伝統工芸品を中心に出品物を決定していった。

この出品物については、西欧の「まなざし」を多分に含んだものであるとしてさまざまな評価・表現がなされている。例えば、矢島（1997）は以下のように述べている。

パリとウィーンの万国博覧会を通じて西欧に紹介された日本の伝統工芸品や絵画・木版画などが、ジャポニズムを煽り立てることになる。（矢島、1997、p22）

日本の「伝統文化」が、「文化」として初めて枠組みを与えられることになった一旦がここに見えると矢島（1997）は指摘する。結局日本という国の文化を文化として確立させるものは、西洋の持つような科学や技術といった「優位性」「先進性」ではないもの、つまり「異質性」という意味でのオリエント性、いわば「発見されるものとしての日本」しかなかったのである。この異質性を、しかし西洋に「並び立つ」ための道具に仕立て上げていかなくてはならないという困難さが、やがて文化財・古美術と天皇権の接近を許すことになっていく。つまり、日本の「博物館」の軸が、古器旧物の収集・保存に傾き、「西洋」的なミュージアム概念の内実を

孕み始めたのは、万博への参加による「西洋」にまなざされるものとしての日本を自覚した瞬間であったのだ。

しかし、まだ時代は明治の初め、天皇を中心とした中央集権もおぼつかぬこの時代、ウィーン万博より帰国した佐野は『博物館設置ニ関スル意見書』(1875)を提出し、その中で「殖産興業」「富国強兵」の概念に基づいた啓蒙施設的な博物館を提案している。ここからは、創設期の博物館が先に見たように西洋に対する「文化」形成の中心としての役割よりも、物産会にも似た商業的な役割を期待されていたということがわかる。

同年、博覧会事務局は改めて「博物館」の号を得て内務省に管轄を移すことになる。この内務省博物館は現在の内幸町一丁目に開設され、ウィーン万博の出品物が展示されたほか、動物展示も行われた。翌年、博物館は上野公園に移転、1881年にジュサイア・コンドル（Josiah Conder）の設計した建物に移り、動物展示場は天産部付属動物園として上野清水谷に開園することになった（現東京都恩賜上野動物園)。内務省博物館は、人工物から天産物までを含み、矢島（2012）はこれを「動物園や植物園もともなう総合博物館」と称し「本格的な欧米スタイルに近い博物館の実現」（p65）と評している[6]。

この内務省系博物館の成立に関わった人間に関して、矢島（2012）はさらに以下のような分析を加えている。

> …内務省博物館では分類と展覧に明確な基準がつくられていった。…この博物館の構想は、佐野常民がいわばそのリーダーであり、同時に、岩倉使節団の中核をなした大久保利通や伊藤博文らもリーダーであった。大久保や伊藤が欧米で実際に見聞した博物館のなかで、ある意味で最も感銘を受けた英京ロンドンのサウスケンジントン博物館のあり方がそのモデルとなったといわれている。（矢島、2012、p65）

そして矢島（2012）は、この博物館で政府が叶えようとしたこととして、「欧米に認知され、不平等条約を解消する」ために「国力を増進させること」を挙げ、「既存の社会の諸制度を根底から改変し、最新の技術を受け入れる」こと、また「次の世代を支える人材の教育」によってそれが実現されるという思想に基づき、他の諸制度とともに博物館制度も位置付けられてきたとする[7]。

つまり、当時の博物館創設に携わった人間の主眼は、コレクションの形成、調査研究というところを飛び越えて、あくまでも啓蒙活動に置かれていたと矢島（2012）は分析しているのである。この点について、矢島（2012）はさらに「博物館の生命がコレクションとその研究であることについての認識は必ずしも強いものではなかったように見える。コレクション形成とその研究には、専任の専門家が必要であるものの、内務省博物館の場合も、教育博物館の場合も、この点では不十分といわざるを得ないまま推移する。」（p65）と記述しており、彼が博物館の根幹的な役割として「コレクション形成」およびその調査研究を捉えていることがわかる。

一方、「人材教育」の方に力点を置く博物館として、内務省博覧会事務局から文部省博物局が分離し、独自の博物館に加え小石川薬園、書籍館を所管することになる。この文部省所管の博物館は「東京博物館」と名を改め、学校教育のための博物館を提唱していた田中不二麿と文

部省顧問ダビッド・モルレー（David Murrey）の二人の努力のもと、カナダのトロントにある教育博物館をモデルに資料を収集、第一回内国博覧会開催と同じ1877年に上野山内に教育博物館として開館する。

教育博物館と言っても、現代における「社会教育」という類の意味の「教育」ではなく、天産物の標本や理科の実験器具など、実際に学校教育で使用される教材の製作・貸し出し・販売を行う「先生」のための博物館で、科学教育の学術講義なども行われる、「理科教育のための教育」が行われる場所であった[8]。

殖産興業という大きな流れから理科教育・科学人材教育の流れが分岐し、それぞれに発展を遂げていく中、佐野・町田・田中（芳）ともども博物館政策から遠のいていく。1886年に農商務省（元内務省系）の博物館は宮内省に移管され、「東京帝室博物館」へと名称を変える[9]。この帝室との接近は明治期の博物館政策の中でも大きな変化として取り上げられるが、吉田はその背景として「1885年（明治18年）に内閣制度が発足し、政府と帝室が分離されたのを受けて」（p99）と説明している。

この帝国博物館は東京だけでなく京都・奈良にも設置され、「殖産興業」的運営から「宝物」収集・保存を軸に置いた運営へと目的を変えていく。この要因として、吉田は宮内省の臨時全国宝物取調局の委員長・九鬼隆一が帝国博物館の館長に就任したことを挙げている。博物館は歴史、美術、美術工芸、工芸、天産の５部構成となり、美術部長には東京美術学校幹事の岡倉天心が据えられ、以降九鬼・岡倉の両名が「宝物調査の拠点」としての博物館運営を進めていくこととなる。

一方、文科省系の教育博物館は師範学校の整備などが進むにつれ需要を失い、上野から湯島に移され師範学校付属の施設として鳴りを潜めることになる。

この両者の変容について、吉田は帝室博物館に着目して記述しているのに対し、矢島（2012）はあくまでも通史的な記述にとどまっている。

ただ、矢島も1997年の著作においては以下のように帝室博物館に着目した記述と、その背景を示唆するような分析をして明治前期までの博物館政策をまとめている。

> 明治政府の条約改正のための急速な欧化政策は必ずしも成功しなかったが、勧業政策は日清戦争を経て軽工業の開花へと結実する。明治中期には、憲法制定や国会の開設を控えて、政府は、国体を整え、天皇と皇室の位置を明らかにしておく必要に迫られていたと見ることができる。帝室博物館の創設は、その一環であり、諸外国の王室、皇室などが美術館を中心とするステータス・シンボルとしての博物館を持ち、学術、芸術の庇護者としての姿を内外に示していることに倣おうとした変化であろう。つまり、その意味は極めて政治的なものであったと言えよう。（矢島、1997、p23）

国内外における日本のステータスを喧伝するための施設としての「博物館」はまた、「日本文化」のイメージを生み出すものでもあった[10]。集められた古美術は、先に博覧会政策においてもその「オリエンタル性」を主張するものとしても定義づけられていたが、ここにおいては自国の「正統性」の象徴として定義づけられており、その定義を行う場所こそが「博物館」で

あったのだ。

このような、「殖産興業」政策の一環としての「博物館」から、「日本文化」の証明としての「博物館」[11]までの変遷が、明治初期から前期にかけての博物館のありようとして現代まで共有されている。

このように、「博物館学」による「博物館」の記述においても、その政治性や社会情勢との関係性に言及がないわけではないが、あくまでも事実の整理というところがいずれの著作においても顕著であり、また「ミュージアム」の機能からそれを分析するために、当時の「博物館」の評価として「西欧的であるか」がやはり軸になっている場合がほとんどである。

つまり、当事者としての「私たち」から見た「博物館」の姿ではなく、あくまでも西洋「ミュージアム」に対照させた存在として「博物館」を見ているということである。事実として何が起こったのかの整理をすることと、どのようにそれを意味づけていくのかの作業については別の段階における議論として考えなくてはならないが、日本の「博物館学」においてはそれを分別することが自覚的に行われていないように見える。

それは、こと「博物館学」のテキストにおいては「博物館史」が「ミュージアム」史の記述から始まり、それに連なるものとして「博物館」史を取り上げているからであり、先に触れた高橋の「博物館」というタイトル同様、「ミュージアム」と「博物館」、「ミュゼオロジー」と「博物館学」を同一のものとして扱っていることにつながっている。

松宮（2003）が「ミュージアム」を相対化し得たのと同様[12]、日本「博物館」も、一つの地域における存在として相対化される必要があると考える。それはつまり、「ミュージアム」と「博物館」を普遍的なものの別の場所における表象として捉えるのではなく、生まれた背景も寄って立つ概念も違うものとして捉える必要があるということであり、今まで整理されてきた歴史的事実をもう一度「日本」という文脈の中で記述し直すということである。

（2）専門研究としての博物館史

「日本」という文脈の中で記述しなおす対象として、日本の「博物館」にまつわる事実関係を整理した研究を参考にする必要がある。

歴史的事実の体系化を行うものとして、「ミュージアム」史研究同様、日本「博物館」史についても、それを専門的に記述しようとする研究が存在する。

ここでは、椎名仙卓の研究に関して、前項の「概論」の分析同様、明治前期までの議論を中心にその様相を分析していきたい。

現代において日本博物館史を体系化し、確立したものの一つが椎名の研究である。

椎名は『日本博物館発達史』（1988）、『明治博物館事始め』（1989）、『図解博物館史』（1993）、『日本博物館成立史：博覧会から博物館へ』（2005）といった数々の著作の中で、日本の博物館、博覧会の詳細を記述、体系化し、その始まりをいきいきとした姿で描くことに成功している。

特に、教育博物館（現在の国立科学博物館）についての詳細[13]や、物産会・博覧会・博物館の流れの整理、歴史には載らない裏話的な記述などは、他のテキストにはない椎名の独自な記述といえる。

『日本博物館発達史』では、通史として日本博物館の成り立ちが描かれており、「博物館学」「博

物館概論」と同様、幕末期の西洋ミュージアムとの出会いと使節団員の記述から始まり、明治、大正、昭和と時系列順にその詳細が描かれている。こと、この著作の明治期までの記述として特徴的なのが、教育博物館にフォーカスしているということである。

明治期は第一章から八章まで分かれているが、八章あるうち第三章から六章まで、つまり半分の章が「教育博物館」をタイトルに冠している。内容は教育博物館の資料の種類や収集方法、教育普及活動といった現代的な博物館の役割に沿った紹介にとどまらず、当時開催されていた科学講習会の様相まで記載している。明治期の博物館の発達を、教育博物館の成立史と重ねているといえる記述である。

通史的な記述としては『図解博物館史』も同じく時系列順に博物館の成立・発展を描いている。こちらはそのタイトル通り図や表が多用されているのが特徴だが、内容としては『日本博物館発達史』よりもより「通史的」である。始まりは「日本」ではなく「ミュージアム」の語源（第一章）で、第二章から日本の前近代史が紹介されるという少々変わった構成になっている。前近代では「出開帳と見せ物」、「物産会の開催とその内容」が幕末期のミュージアム体験記の前に配置されており、近代以降明治期は「近代西洋博物館思想の導入」「博覧会の開催と博物館の誕生」「内務省博物館の成立とその推移」「教育博物館の設置とその推移」「地域博物館の成立とその役割」と、一つの種類に偏ることなく均等に各博物館が紹介されている。

一方『明治博物館事始め』では、通史的・時系列的な整理というより、博物館内外のエピソードをまとめることに注力している。対象としているのは幕末・明治期の博物館政策・運営で、一つの人物や展示に着目した36の短い記事から成っている。大きな流れを眺める『日本博物館発達史』とは打って変わり、博物館をめぐる様々な事情の詳細を、少し砕けた調子で読むことができ、論文というより読み物に近い著作と言える。ただ、その詳細は博物館を研究していく上で重要なポイント を指摘しており、博物館研究の切り口として示唆に富んだ内容となっている。

江戸幕末期の本草学・物産会の興隆から明治期の博覧会政策、そしてその延長としての博物館を描こうとしているのは『日本博物館成立史：博覧会から博物館へ』である。ここでは、江戸・幕末期の物産会の興隆から明治期博覧会の企画、展示物、関係者が目録などと共に詳細に記述されている。

このように、椎名の研究では、日本博物館に関する様々な視点からの事実の収集・整理が行われている。これらの研究成果は、あくまでも「何があったのか」「誰がそうしたのか」という比較的事実のみを列挙するような形態[14]であるからこそ、これから考えていこうとしている「日本にとっての「博物館」の意味」、つまり日本「博物館」についての当事者的分析において、非常に有益であると言えよう。

（3）歴史と思想の狭間：日本博物館史に対する思想的議論

事実的研究が果たされているということが確認できたところで、では、日本「博物館」について日本という文脈に置き直そうとした例についても見ていこう。

先ほど日本「博物館」に関してあまり当事者的研究が存在しないというふうに記述したが、それが全く存在しないわけではない。

まず、「思想」という点を自覚的に扱おうとした例として、村田麻里子の『思想としてのミュージアム』(2014) がある。そのタイトルにもあるように、これは「ミュージアム」を思想的な存在、社会の中に意味を持つ存在として「社会の側から」描こうとした著作で、構成としては「ミュージアム」の分析から「博物館」の分析というように、これまで見てきた「博物館学」の方法とあまり差がない。例によってこの著作の中で「博物館」は、「ミュージアム」を日本に取り入れたものとして分析されている。他の「博物館学」と立場を異にする点としては、成し遂げられているかは別として「思想」という観点からの分析を意図的に行なっているという点である。内容としては、村田は「ミュージアム」「博物館」の思想を「まなざし」というキーワードを軸に分析しており、文字通り人々の「視点」を変容させた動的影響力のある存在として「ミュージアム」「博物館」を捉えている。

次に、『ミュージアムの思想』(2003) において「ミュージアム」を相対化した松宮の「博物館」分析がある。松宮は、「明治前期の博物館政策」(1995) や「万国博覧会とミュージアム」(1995)、「岡倉天心と帝国博物館」(2001) など、明治初期～中期にかけての日本博物館政策に関連する論文を書いており、いずれも「博物館」にまつわる歴史的事実を踏まえつつ、それに対して「博物館」がどんな意味をもたらしたのかについて、日本という地域・視点を軸に論じている。ただ、松宮はもともと「ミュージアム」という概念を非当事者の視点から確立した立場であるから、基本的に「博物館的」であることの軸が彼の規定する「ミュージアム」機能・概念に依存しているきらいがある。これはまさしく、これまで見てきた「博物館学」が陥ってきた課題であり、日本「博物館」の分析の中において「ミュージアム」という存在を相対化し切れていないこと、つまり私たちにとっての「博物館」概念を確立し得ていないことの証左でもある。

しかし、松宮の「博物館」分析は、先に見た『ミュージアムの思想』における相対化の手段としての前近代・近代という着目点を受け継いでおり、「日本という文脈」の発見について非常に示唆に富んだ研究であると言える。松宮は徒に「ミュージアム」と「博物館」をつなげよう、同一化しようとしているのではなく、あくまでも、それぞれの社会の中における意味を探ろうとしている。彼の「博覧会」への着目や、「日本文化」の確立にまつわる「美術館」関連への関心は、それを明確に物語っている。日本という文脈を確立する上で、あくまでも日本「博物館」が寄って立とうとしたところ、つまり明治初期における「博覧会」との関係、明治前期の終わりに登場する「美術館」の勢力に言及するのは、日本の中においても「前近代」(江戸期の学問からの流れとしての「博物学」と近代以降の博覧会・博物館政策の連なり) と「近代」(「美術」概念の誕生と確立に対する「博物館」の立場) という軸をもとに分析を行い、「日本」という流れを明確にしようとしているからではないだろうか。

そして、最後に確認したいのは伊藤寿朗の「日本博物館発達史」(1978) の記述である。これは伊藤が森田恒之と編集した『博物館概論』内にある日本「博物館」史に関する一つの独立したタイトルである。この論文の表面的な位置付けだけ見れば、先に眺めてきた「博物館学」「博物館概論」同様、大きな括りの中の一部に過ぎないようにも思われるかもしれない。

しかし、この著作の独自性はその導入部からして確固たるものであると言える。

博物館は社会のなかで生まれ、育ち、あるいは死んでいく。博物館のあり方は同時に社会

のあり方の反映でもある。現実の博物館は決して時と所とを超えたものではありえず、博物館活動という、博物館の組織体に共通した固有の存在形態もまた、それを規定する時代とともに大きく変化してきた。（伊藤、1978、p82）

これは「日本博物館発達史」の冒頭、「Ⅰ博物館史の研究―価値実体としての博物館活動―」の語り出しの部分だが、伊藤は「博物館」史の始まりとして、まず博物館を特定の地域の中で語ることの必然性を確認している。

そして、物と人間との関係性を築く場、つまり構築・再構築の別ではなく、人間が作り出す個別具体的な物の価値・意味の形成の場としての博物館という空間において、その活動の価値は物の内容的な価値の発見にとどまらないと指摘する。

博物館の本来的な目的である〈人間と形而下の物とがもつ普遍性を、人間の側から、物に即して計画的に組織化する〉という価値（博物館学芸活動）は、一方では資料そのものの内容的価値によって、他方では、その内容的価値を必然化させ、具体化し、かつ実現する価値実体（博物館活動）と、それが置かれている場（歴史的条件）とは離れてはありえない。物の価値は社会的存在としての人間が意識するところに成立するのである。（伊藤、1978、p82）

これはつまり、物を「博物館的に」取り扱おうとする行為そのものが、社会の中に根ざすものであり、その学芸活動がいかに普遍性を目指すものであろうと、その地域性から逃れることができないということである。この姿勢は松宮（2003）が「ミュージアム」に対して持っていた「相対化」のスタンス[15]と重なり得るものであり、違うのはその足元として「西洋」を選んだのか「日本」を選んだのかという一点である。

また伊藤は、この地域性の自覚から、西洋「ミュージアム」と日本「博物館」を同一視するような動きへの違和感を示している。

明治維新以来今日まで、欧米博物館の視察にもとづく幾多の提言が、いかにすぐれたものであろうとも実現することなくついえ去ったのは理由のないことではなかった。価値は価値実体とその場に即してのみ現象し、実現する。それ以外にはありえない。そしてどのような価値を求めるかは社会生活が決定するのである。（伊藤、1978、p82）

ここまでの部分は、博物館という容れ物・空間自体のみというより、そこで行われる価値付けという行為まで含めた価値のあり方を議論しているものであると言える。

そして伊藤は、近代博物館について、「価値に対する価値実体が博物館活動という固有の位置と関係性とをもって登場した」（p82）ことを以て成立したと見なしている。これはつまり、物との関係性を扱うという普遍的な行為を、特定の社会や場において実体化するという役割を負った制度として博物館[16]を位置付けているということであり、この意味において近代博物館は近代以前の「博物館的」な施設、つまり前近代における博物館機能の発見とは区別されると

いうことである。こう書いて仕舞えば至極当然なようにも思われるが、これを確認することはつまり伊藤における「前近代」と「近代」の区分がどのような意識で行われているのかという課題につながるので、本稿上にとっては重要な観点となる。

さて、伊藤は上記のような博物館認識の上で「博物館における価値実体の変化とその要因を、そして、それにもとづく共通した価値の現れ方の過程を明らかにする」(p83) ことが「博物館史」の果たすべきこととしているが、まずここでいう「共通」とは、国を超えた普遍的なものとしての博物館活動という意味ではなく、「歴史」「美術」「動物」といった分野横断的な分析をするという意味であるように思われる。つまり、博物館活動の対象となる資料の具体性に関しては分別をせず、その集めて展示するという箱自体に対する社会の要求については具体的な地域性の中で見るという旨である。そして、その共通した要因を探ることが「博物館史」の方法であり、また、今まで見てきたような観点から「博物館の歴史を、日本における近代社会の形成に対応した博物館活動の近代化への過程として措定」(p83) することが可能であるという。

このように、伊藤は「Ⅰ博物館史の研究」において、「博物館史」に入る前に「博物館史研究」というものが見据えるべき視点、用いるべき方法について丁寧に解説している。ここまで明確に「博物館史」を定義付けしている「博物館学」のテキストは珍しく、彼独自の成果と言えるだろう。特に、その地域性への自覚という点では、この後地域の中での博物館のあり方、市民のものとしての博物館のあり方を模索していった伊藤の根本的な思想がうかがえる記述であると言っても過言ではない。

この「博物館史研究」の分析以降、日本「博物館」の発達史を「①明治維新以前の博物館の前期的諸形態、②明治維新以降の西欧型博物館の日本的定着過程、③戦後の近代博物館としての成立とその発展過程」(p84) と区分しながら記述している。この区分上にあるように、伊藤は「博物館」という語をかなり汎用的に使用している。その性質や要求のされ方の違いについては「前期的形態」「西欧型」「近代」などの説明を加えることで区別しているようである。

それぞれの内容に関しては、「Ⅰ博物館史の研究」での宣言通り、歴史的な事実に対してそれがいかに「博物館的機能」および「博物館」を要求していったのかに着目を置き、時代ごとの人々がその機能や箱を使って遂げようとしたこと、またその方法について詳細な分析を加えている。

このように伊藤は、当事者的意識を自覚的に持ちながら日本「博物館」史を記述することに成功しているように思われる。しかし、やはり「博物館概論」のテキストであることの限界か、どこか一つの政治的背景や博物館の機能に着目しきれない場面もあり、基本的には「通史」の域を出ることはない。ただ、先にも述べた通り、その地域性の自覚と記述方法の模索という点においては、他に類を見ない研究となっているため、今後日本「博物館」史を日本という文脈において再構築していく上では、非常に示唆に富んだものであるということができる。

「博物館学」における「博物館史」の祖型

これまで、「ミュージアム」と「博物館」という二つをあえて別のものとして扱い、それぞれに関する日本の中での議論を、「博物館学における歴史的分析」「専門的な歴史分析」「歴史への思想的アプローチ」の順で追ってきた。

ここでは、これまで眺めてきた西洋「ミュージアム」史、日本「博物館」史の国内における記述の祖型として、棚橋源太郎の研究を取り上げたい。

なお、引用・参考にした棚橋の著作に関して、ここでは全て新字体に直して表記している。棚橋は明治に生まれ昭和の頃まで活躍した教育家・博物館学者である。教育家としたのは元々が師範学校の出で学校教育、こと理科教育に熱心であったことを指す。博物館に関しては、実際に館長なども務めているため、ただ「博物館学者」とするのは説明不足であるが、ここではその生涯を追うことに目的がないため、彼が「教育」という点において学校と博物館とを経験し記述したことを把握するのみにとどめたい。

さて、そんな棚橋だが、博物館における理科教育や実践的・経験的な教育に関しての研究をしていた中で、博物館の歴史に関しての著作もいくつか発表している。そのうち、今回は彼の主著『眼に訴へる教育機関』(1930)の第一章「眼に訴へる教育機関発達の歴史」と、『博物館・美術館史』(1957)の二つにおける記述の方法を分析していきたい。

分析の方法としては、これまで眺めてきた日本国内における「ミュージアム」史と「博物館」史の研究における記述の方法のうち主に論の構成の異同に着目し、その特徴を捉えていきたい。

まず、棚橋の「ミュージアム」史の記述であるが、「眼に訴へる教育機関発達の歴史」(1930)においては、各項目の最後「本邦博物館の変革」を除いてはそのほとんどが西洋「ミュージアム」の記述となっている。構成としては、以下の通りである。

世界最初の博物館―羅馬時代の家庭博物館―欧羅巴中世代の博物館―文芸復興時代の博物館―科学の進歩と自然物の蒐集―MUSEUMと云ふ語の使用―昔の博物館の陳列品―早期の博物館―その後に出来た舊い博物館―専門の博物館―見世物としての博物館―蒐集品の散逸―非科学的な舊博物館―舊博物館の陳列法―博物館陳列法の改善―博物館建築の革新
(棚橋、1930、目次)

まず着目したいのが「博物館」という語の使用方法の汎用さである。ここには基本的に古代～近代までの「博物館」が時代ごとに列挙されるか、もしくはその性質(専門的か、科学的かなど)や建築、陳列方法といった小テーマで分類してあるが、特徴的なのはほぼ全てに「博物館」の語が当てられていることである。「世界最初の博物館」[17]はまだ理解ができるが、「昔の博物館」[18]や「早期の博物館」[19]「舊い博物館」となるともはや区別が曖昧になってくる。

また、途中で「MUSEUMと云ふ語の使用」という項目が登場するように、「ミュージアム」という言葉自体に関する分析も差し挟まる。このような一種混乱に近い記述はつまり、「眼に訴へる教育機関発達の歴史」(1930)の段階では西洋「ミュゼオロジー」の翻訳・受容も始まったばかりであったということの証左であると同時に、細かい言葉の使い分けの不自由さに関しては、現代における「博物館学」の「ミュージアム＝博物館」という認識のより荒削りな側面を見せていると考えるよりむしろ、見出しにおいて徹底して「博物館」という日本語を使っているあたり、自覚的に「ミュゼオロジー」を日本に取り込もうという気概さえ垣間見えると言った方が相応しいように思われる。

この「ミュージアム」史をめぐる記述は、『博物館・美術館史』(1957)において、もう一段

階の整理を経ることになる。

『博物館・美術館史』では、その全編が歴史に関する研究なため、それぞれの時代ごとに独立した章を設けている。そのうち、西洋「ミュージアム」に関する部分は前半部、「前編　欧米博物館・美術館の発達」に収められ、章のタイトルは以下のような表記になっている。

第一章　黎明期の博物館
第二章　文芸復興期の博物館
第三章　十七八世紀の博物館・美術館
第四章　十九世紀前半の博物館・美術館
第五章　第一次大戦までの博物館・美術館
第六章　第一次大戦後の博物館・美術館
第七章　博物館の国際的協力
（棚橋、1957、目次p5～8）

「昔」や「舊い」などの形容詞的な分類・表現ではなく、完全に時系列になっていることがわかる。そして、その分岐となる出来事・世紀はほとんど先に「博物館学」の「ミュージアム」史分析で見たようなものになっている。また内容としても、時代ごとの政治的背景を説明するような項目[20]が各時代に設けられていたり、十八世紀においては個別の博物館について項目を作って解説したり[21]、現代「博物館学」の祖型とも言えるような記述をしている。

日本の「博物館」史についても、現代における構成と重なる部分がかなり多く見られる。

「眼に訴へる教育機関発達の歴史」(1930) においては、先にも述べた通り「本邦博物館の沿革」という一つの項目のみだが、明治維新後から昭和初期までの通史的な記述となっており、田中芳男や佐野常民といったキーパーソンが出てくるほか、帝室博物館や教育博物館など、内務省系文部省系それぞれに流れの博物館を区別して解説している点などは現代のそれにも近いように思われる。他方、棚橋独自の特徴としては、軸に「教育博物館」、つまり理科教育を担った博物館が置かれているということである。この「理科教育」という点があるために、この1930年の著作では佐野・田中に言及する一方で町田の名前が出なかったり、前近代への言及がなかったりしたのかもしれない。

やがて『博物館・美術館史』（1957）になると、「美術館」という名前が明確に使用されるようになり、「博物館」史の射程範囲もかなり拡大する。例により明治前期までの目次を確認してみよう。

第一章　美術館の役をした本邦の社寺
第二章　封建時代の家庭美術館
第三章　明治時代前期の本邦博物館・美術館
（棚橋、1957、目次p8～9）

第一章の「社寺」というのは、より具体的には飛鳥奈良時代の寺社仏閣における宝物庫のこ

とで、主に大陸文化の輸入を背景として語っている。そして、ここで「美術館の萌芽宝物館」として紹介されるのが「正倉院」である。これは、現代の「博物館」史において前近代の始まりに通ずる分析である。また、この寺社仏閣における「博物館機能」の延長として、絵馬堂や「寺の開扉」、つまりご開帳を挙げている。

第二章については、「書院造」や茶の湯の文化が重点的に扱われており、これもまた既視感のあるラインナップとなっている。

明治期以降に関しては、1930年のものよりもより通史的な表現が多くなっている、というのも誌面の拡大もあってか教育博物館の影が比較的薄くなっており、その代わりに博覧会や地方博物館の記述が増えている。

このように、棚橋の「ミュージアム」史および「博物館」史を見てみると、現代「博物館史」に通じるような表現が散見されることがわかる。また、1930年と1957年を比較して興味深いのは、「博物館」に関する歴史の記述と、「博物館・美術館」に関する歴史の記述で扱う時代の幅が異なることである。これは、棚橋においては「博物館」という言葉が想定する範囲と、「美術館」という言葉が想定する範囲が明確に区別されているということであり、こと明治時代以前の「博物館的」機能は全て「美術館」機能として解釈されているということは非常に興味深い。これは、「理科教育」の専門家であった棚橋だからこそ、「博物」という言葉の意味が現代の博物館学者含めた他の人間よりも細分化されていたとも言えるし、その棚橋を以てすれば明治以前に「科学」が存在していなかったということ、またその「科学」について展示・教育する「博物館」も存在しなかった、つまり蒐集はするもののそれらは基本的に「美術」の範囲だという考察になっても不思議ではない。ただし、これについては1930年も1957年も、西洋「ミュージアム」に関しては基本「博物館」を当てるか、個別の名前を使用するかしていることを含めて考えれば、一概にこの法則が成り立つとも言えないので、さらに多くの文献にあたりパターンを分析する必要があるが、本稿の主旨とは逸れるため、今回はあくまでも「可能性」への言及にとどめることとする。

このように、「博物館」という言葉をめぐってはその祖型たる棚橋の記述からもその汎用性の高さ、言い換えれば「ミュージアム」＝「博物館（・美術館）」という大まかな等式が成り立っており、それを細分化しないまま「博物館」の語を利用するだけでなく、現代では「ミュージアム」の表記も堂々使っているあたりさらに混乱を招いているとも言えるのではないだろうか。

西洋ミュージアム史と日本博物館史：

最後に、これまで眺めてきた西洋「ミュージアム」史・日本「博物館」史について、その記述の差について分析し、今後の展望を述べて終わりたいと思う。

日本の「博物館学」において、「ミュージアム」に関する議論は歴史的研究と思想的研究の両者とも西洋における当事者研究の分析（ミュゼオロジーの翻訳）から、日本における非当事者研究まで、いずれも段階を経て深い議論がなされており、またそれが「博物館学」や「博物館概論」といった「概説」においても一つの確立したストーリーとして成立・受容されている[22]。

対して、日本「博物館」に関する議論は、その形式から「何が「博物館」的であるか」の思

想的分析に至るまで、常に「ミュージアム」や「ミュゼオロジー」に対照されるものとして記述・評価がなされている。これは、「ミュージアム」と「博物館」を同一のものであるとする根本的な規定から議論されていないことの証左であり、「博物館」を当事者として相対化し得ていない[23]ということである。

日本において今後「博物館」がどうあるべきかの議論をする上で、無自覚的に「ミュージアム」「博物館」を混同したままであることは問題であると考える。なぜなら、今我々の目の前に存在する日本の「博物館」はどこまでも「ミュージアム」にはなれない（ならない）のであり、どう足掻いてもそれの立つ地域の中、つまり「日本」という文脈の中で意味を見出していく必要があるからである。

日本の「博物館」は今その存在を問われる時にあるが、今こそ本当の意味でこの国に「博物館」が生まれ、受け継がれてきたことの意味を考える時ではないだろうか。つまり、日本という一つの具体的な地域において、「ミュージアム」でなくして「博物館」が作られたことの意味を、作り出し受け継いできた当事者として積極的に捉えていく必要があるのではないだろうか。

今後は、この「博物館」の当事者として捉え直すための方法論を整理し、「博物館」という言葉・概念の起源から記述し直していきたい。

註釈

1　博物館研究史的な観点は今回言及していないため、各著作や研究自体の時系列的な位置付け、関係性は分析の中に含まれない。

2　この「博物館学」は、「現代に至るまでの国内外の博物館に関する国内の先行研究」と同義であり、その内には「ミュゼオロジー」の翻訳や受容も含まれているため、本稿の定義する「日本「博物館」に関する当事者的研究」としての「博物館」学と厳密には同義ではない。これ以降、「ミュージアム」史に関する記述は基本的に「ミュゼオロジー」の翻訳・受容でありながら現行の「博物館学」においては範疇内であるのに対し、「博物館」史に関する記述は「博物館」学のみにおいて成立する概念となる。

3　「概論」の本においては、先に概観した通り「ミュージアム」史と「博物館」史を連ねて配置するものが多いが、著者が同じ場合と異なる場合があり、当然ながらその差が表現の仕方に現れることがある。

4　例えば、米田（2001）では、日本の古代～中世にかけての「博物館的」施設の記述を始める際、「ギリシャで神殿の宝庫をはじめとした収蔵施設が発達したように、日本でも神社や寺院で宗教的貴重品が収集されるようになった。」（p24）というように表現している。また矢島（1997）では、「⑵わが国の博物館の発達史」の冒頭に「わが国においても、西欧の博物館前史と同様の事例は数多く指摘できる。」（p20）という表現を用いている。

5　椎名（1988）は、「博物館」という名称について、「万延元年の遣米使節団の人によって用いられ、文久2年の遣欧使節団の人たちによって、普遍的に使用されるようになる。そして、『西洋事情』などによって、その概念が一般に浸透したものと考えられることができよう。」と述べている。

6　内務省所管の内国博覧会は1877年に上野公園で実施されたが、ここで初めて「美術館」という名称が登場する。この博覧会では「博物館」ではなく、「美術館」「農業館」「機械館」など、事細かに

展示品ごとの名称が館名に当てがわれていたのである。1881年には新しい「博物館の建物を建設」し、第二回の内国博覧会が開催され、翌年には恒常的な施設として博物館が開館している。この時点で博物館は所管を内務省から農商務省に移し、天産、農業、山林、工芸、芸術、史伝、図書の六部門から構成される展示のみならず、付属動物園や有用植物園、書籍室も併設された。（吉田、2019、p99）

7　矢島（2012）、p65

8　この「社会教育」という言葉について、松宮（1995）は佐野の構想した博覧会・博物館政策に対し「社会教育型」という評価を与えている（p265～266）。それはつまり「視覚による「近代化」の教育と国内の産業システムの改造のための国家装置」としての「博物館」であり、先に表現した「啓蒙施設」と同じ意味を持つ。だが、本稿で扱う「東京博物館」における「教育」とは、そのような広い学びのあり方に関する言葉ではなく、あくまでも「学校教育と結びついていた」という狭い意味での用法である。

9　1889年段階では「帝国博物館」と称されていたが、1900年には「帝室博物館」に改称されている。（吉田、2019、p99）

10　吉田（2019）、p100

11　これはもはや「博物」という名を冠するよりも「美術」の名を冠する方がよほど相応しいものであろう。実際、吉田（2019）はこの帝室博物館政策にまつわるものとして「日本美術史」編纂を挙げているし（p100）、矢島も1997年の著作において「美術館」という名前を中心として理解している（p23）。この点についての議論は松宮（1995）も着目しており、明治初期の実学的な政策から明治中期に向けての「保守化」の変化について詳細な分析を施している。

12　別稿（川﨑2023）にて松宮（2003）の分析を行なった。

13　彼は国立科学博物館出身であるため、その前身である教育博物館にこと関心があったのだろうと思われる。

14　椎名の研究・記述が政治的、社会的な部分について、あくまでも事実として「誰が携わり」「何を発言したか」というような分析にとどまっているのは、椎名が元々は科学系博物館出身であることということが無関係ではないと筆者は考えている。

15　注12に同じ。

16　ここで伊藤のいう「博物館」は未だ日本の博物館史の記述に限定しているというわけでもないため、本稿の定義で言えば「ミュージアム」および「博物館」の両者を含むものであるとするのが無難であろう。ただ、基本は日本博物館発達の歴史という見出しの下に書かれていることから、一部には日本の「博物館」というニュアンスの方が濃い使用例も見られることも事実である。

17　アレクサンドリアの「ミューズ館」（原文ママ）のこと。

18　本文から察するに16世紀ごろの博物館のこと。

19　17、8世紀の博物館。

20　例えば文芸復興期における「印度航路の開通新大陸の発見と博物館」、十七八世紀における「フランス革命の影響」、第一次大戦前の「浪漫主義と博物館・美術館」など。対して、現代の「博物館学」や「博物館概論」と大きく違うのは、戦争が第一次大戦で区切られていること、著作のタイトルにもあるが博物館と美術館が明確に区別されていることなどがある。

21　ルーヴル美術館が「ルーヴル博物館」になっているのは興味深い。

22　詳細は川﨑2023を参照されたい。

23 「し得ない」以前の問題であると筆者は捉えている。「しようともしていない」のであり、その自覚の薄さにこそ「博物館」に関する当事者研究の不足の要因があるのではないだろうか。

参考・引用文献

青木豊・鷹野光行編 2017『博物館学史研究事典』雄山閣

青木豊・矢島國雄編 2010『博物館学人物史』上下巻、雄山閣

伊藤寿朗 1978「第二章　日本博物館発達史」『博物館概論』学苑社

金山喜昭 2001『日本の博物館史』慶友社

川﨑真緒 2023「日本における西洋ミュージアム史研究の分析」『MUSEUM STUDY（明治大学学芸員養成課程紀要）』34、明治大学学芸員養成課程（掲載予定）

倉田公裕・矢島國雄 1997「第一章　博物館学概論」『新編博物館学』東京堂出版

駒見和夫 2008『だれもが学べる博物館へ　公教育の博物館学』学文社

駒見和夫 2014『博物館教育の原理と活動』学文社

駒見和夫 2019「万延元年遣米使節団が出合ったミュージアム」『MUSEUM STUDY（明治大学学芸員養成課程紀要）』30、明治大学学芸員養成課程

駒見和夫 2020「文久の遣欧使節とミュージアムそしてエキシビジョン」『MUSEUM STUDY（明治大学学芸員養成課程紀要）』31、明治大学学芸員養成課程

椎名仙卓 1988『日本博物館発達史』雄山閣

椎名仙卓 1989『明治博物館事始め』思文閣

椎名仙卓 2000『図解博物館史』雄山閣

椎名仙卓 2005『日本博物館成立史：博覧会から博物館へ』雄山閣

椎名仙卓 2011「第2節　日本の博物館の歴史と現状」『新編博物館概論』同成社

菅井薫・安井亮 2011「第三章第1節IIアメリカの博物館」『新編博物館概論』同成社

高橋雄造 2008『博物館の歴史』法政大学出版局

棚橋源太郎 1930「第一章　眼に訴へる教育機関発達の歴史」『眼に訴へる教育機関』宝文堂

棚橋源太郎 1957『博物館・美術館史』長谷川書房

中村光男 2008「第２節１．博物館の起源」「第２節２．世界の博物館史」『新しい博物館学』芙蓉書房出版

原田佳子 2008「第２節３．日本の博物館史」『新しい博物館学』芙蓉書房出版

文化庁 2022「博物館法改正に関する資料」資料３～８

文化庁 2022「博物館法の一部を改正する法律の概要」

松宮秀治 1995「８　明治前期の博物館政策」『幕末・明治期の国民国家形成と文化受容』新曜社

松宮秀治 1995「第10章　万国博覧会とミュージアム」『『米欧回覧実記』を読む―1870年代の世界と日本―』法律文化社

松宮秀治 2001「岡倉天心と帝国博物館」、『立命館経済学』第50巻、第５号p660～679、立命館大学経済学会

松宮秀治 2003『ミュージアムの思想』白水社
丸山眞男 1961『日本の思想』岩波新書
水嶋英治 2012「第１章　博物館学論」『博物館学Ⅰ』学文社
水嶋英治 2005「第２章　博物館発達の歩み」『博物館概論』学文社
三好信浩 1995『近代日本産業啓蒙家の研究』風間書房
村田麻里子 2014『思想としてのミュージアム』人文書院
矢島國雄 1997「第二章㈡　博物館の歴史」『新編博物館学』東京堂出版
矢島國雄 2008「棚橋源太郎とその博物館学⑴」『MUSEUM STUDY（明治大学学芸員養成課程紀要）』20、明治大学学芸員養成課程
矢島國雄 2012「第４章　博物館発達の歴史」『博物館学Ⅰ』学文社
山本正身 2014『日本教育史　教育の「今」を歴史から考える』慶應大学出版会
吉荒夕記 2011「第三章第１節Ⅰ　世界の博物館」『新編博物館概論』同成社
吉田憲司 2019「第３章　ヨーロッパとアメリカにおける博物館の歴史と現在」「第５章　日本における博物館の歴史と現在」『博物館概論』一般財団法人放送大学教育振興会
吉見俊哉 1992『博覧会の政治学―まなざしの近代』中公新書、
米田文孝 2001「第Ⅰ部　博物館学　第１章博物館概論　第２節博物館の歴史」『博物館学概説』関西大学出版部
Dancan F. Cameron 1972 “The museum, a Temple or the Forum” The Journal of World History, Society, Knowledge, pp.48-60